

杉江 修治 著

『バズ学習の研究』を読む

鹿内 信善

■ 「灌腸」を口にする

知っているようで知らないことはたくさんある。以前北京で「灌腸」を口にして、つくづくそう思った。

昨年わたしは、北京に長期滞在していた。その時、スーパーの食品売り場で「灌腸」と印刷された袋を見つけた。「珍しい食べ物だ」と思ってひとつ買ってみた。しかし部屋に戻ってから、本当に食べた方がいいものなのか、少し心配になってきた。そこで、部屋の掃除に来てくれるおばさんに聞いたり、辞典を調べたりして、ようやく次のようなことがわかった。そして「灌腸」に対するイメージがひろがった。

「灌」とは「注ぎ込む」という意味。

だから、腸に注ぎ込むものは全部「灌腸」という。わたしたちがよく知っている

「カンチョー」も「腸詰めのソーセージ」も、みんな「灌腸」。わたしが買ってきたものは、さつまいもデンブンを豚腸に注ぎ込んで蒸したものだ。ただし最近では、豚腸を使わず「のしもち風」にして蒸しあげている。薄切りにしてあぶってニンニク醤油で食べると美味。良質のデンブンを蒸したのだからとても消化がよい。

■ 消化のよい本

北京で「灌腸」を食べて帰国したら、杉江修治著『バズ学習の研究』が届いていた。一読して、これは消化のいい本だ、

とわたしは思った。『バズ学習の研究』は教育心理学の専門的学術書である。しかし、一般の学術書にありがちな晦渋さはまったくない。ごく普通に読み進めれば自然に理解できるように書かれている。それが、この本の魅力のひとつでもある。たとえばこんな調子である。

書名は『バズ学習の研究』。サブタイトルは「協同原理に基づく学習指導の理論と実践」。バズ学習は、「故塩田芳久名古屋大学名誉教授によって理論化と実践化が進められた」「人間関係を教育の基盤とする：幅広い学習指導理論」「各教科の指導法のみならず、生徒指導の各領域で：学習指導原理として生きる理論である」。

このように、「はしがき」の一部を読んだだけで、バズ学習とは何か、だいたいのイメージをつかむことができる。書き手が、書いていることを充分理解して書いている本は、読みやすい本である。

教科指導にも生徒指導にも適用できる

協同学習の理論が「バズ学習」である。

■ マイナーなバズ学習？

教育の現場にいる人なら、たいてい「バズ学習」ということは知っている。こゝばを知っているだけでなく、ある程度のイメージももっている。それでいて、バズ学習とは何か、あまりよく理解していない。

わたしは、小中学校の先生方と会合をもつことが多い。そんな時、バズ学習について話題にするといろんな反応が返ってくる。「ああ、班学習ですね」「集団主義の教育はどうも……」「えっ、バズ学習ってまだあるんですか？」等等。

「バズ学習は一九六九年に第一回の全国的な研究会を開催し」現在も、全国的に研究と実践が重ねられている。生きる力だ、自己教育力だと、中身のよくわからないキヤッチフレーズが一時もてはやされ、すぐに消えていく、こういう風潮の強い教育界において、これほど長く

実践力を提供してきた学習指導理論が、ほかにあるだろうか。バズ学習は「班学習」等の、単なる指導技術ではない。杉江が言うように「バズ学習が単にバズ・セッションを活用する指導技法にすぎない」とすれば、教育現場にそのような持続的関心をよぶことはできないだろう。

■ 「バズ学習」のイメージをひろげる

バズ学習は、現在も全国規模で研究・実践が継続されている。とは言え、流行すたりの激しい教育界である。最近、バズ学習の実践者や実践校も少なくなってきた。現場の教師たちが力を合わせて発展させてきた、日本生まれの独創的な学習指導法をもっと普及させてもいいのではないだろうか。

「バズ学習は協同学習である」。杉江は、このことをキーコンセプトにして、バズ学習の理論を一層実践力のある理論に発展させている。かつて塩田芳久教授は「バズ学習」を創始し、全国の教師たちと力

を合わせて多くの教育問題を解決してきた。今学校はまた、多くの新しい問題を抱えている。杉江がまとめた協同学習の理論は、現在の困難を切り拓いていく力となるものである。

バズ学習は常に、現場の教師たちと一緒にあって理論と実践方法を作り上げてきた。杉江の「バズ学習協同学習理論」も、実践の場から生まれた実践の理論である。「バズ学習の研究」は、実践の場にいる多くの教師たちに、バズ学習の新しいイメージを伝えてくれる名著である。

■ 協同学習のハンドブック

「バズ学習は協同学習である」このようにまとめると、何か少しわかった感じがしてくる。しかし「協同っていったい何だろう」と考えてみると、これが結構難しい問題なのである。

辞書的には、協同とは「心をあわせ、力をあわせ、助けあって仕事をすること

と」である。この概念を最も簡潔に表す文字をわたしたちにはもっている。それは「友」という漢字である。図1からわかるように、「友」は左手と右手を合成した文字である。相手の手に自分の手を添えて、力をあわせ助けあって事をなす、それが友である。友を構成する「又」という字はまた、「助ける」という意味ももっている。

しかし、「友」のより古い字形(図2)は、これとは少し違った意味を表している。盟誓の酒器の上に双方の手を置いて約束を交わす、協同を約束する。古くはそれが「友」だったのである。

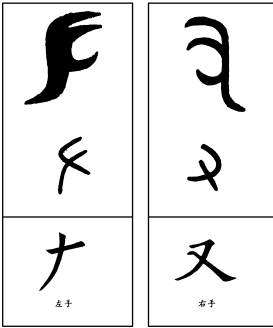


図1



図2

成熟した社会で自発的に生まれる協同と、約束しなければ成立しない協同がある。協同のあり方は、その時の社会の状況によって変わってくるものなのである。

協同の概念はゆれうごく。だから「協同とは何か」をきちんと整理しておかなければ、実践可能な協同学習の理論はできない。実は、『バズ学習の研究』で最も力が注がれているのが、この問題なのである。

心理学のみならず、社会学・教育学・哲学等で、協同や競争はどうとらえられてきたか。協同学習は、欧米で、そして日本でどのように実践されてきたか、等等など。協同学習を進めるために必要な情報、この本にはすべて網羅されている。さらに索引がきめ細かに作られているの

で、ハンドブックや事典としての使い方も可能である。例えば索引で「嘉納治五郎」を引いて本文にあたると、武術の領域で協同と競争がどのようにとらえられてきたか、といったことがわかる。わたしは今、この本を協同学習に関するハンドブックとして活用させてもらっている。

杉江修治著『バズ学習の研究』は、風間書房発行、一万二千元。学校や地域の図書館に備えて、多くの人に活用してもらいたい本である。

(注1図1は、林西莉『漢字王国』山東画報出版社から、図2は、白川静『字通』平凡社から引用)

しかない・のぶよし
北海道教育大学・教育学部